



TITLE:

朱子語類論文篇譯注(五)

AUTHOR(S):

興膳, 宏; 木津, 祐子; 齋藤, 希史

---

CITATION:

興膳, 宏 ...[et al]. 朱子語類論文篇譯注(五). 中國文學報 1999, 59: 162-175

ISSUE DATE:

1999-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177841>

RIGHT:

朱子語類論文篇譯注(五)

興膳宏  
京都大學

木津祐子  
京都大學

齋藤希史  
奈良女子大學

126 人有才性者、不可令讀東坡等文。有才性人、便須取入

規矩。不然、蕩將去。

才能のある人には、東坡などの文章を読ませてはいけない。才能のある人は、規範を身につけるべきだ。そうでないと、放埒になってしまう。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「才性」は、才能、才覺。

「規矩」は、のり、規範。

「蕩將去」は、たがが外れた状態になってしまう。「一」將

去」は、方向補語の機能を備える。『語類』に類出。

127 因論今人作文、好用字子。如讀漢書之類、便去收拾三兩箇字。洪邁又較過人、亦但逐三兩行文字筆勢之類好者觀看。因論南豐尙解使一二字、歐蘇全不使一箇難字、而文章如此好。揚。

ついでに論じられるには、「今の人は文章を書くのに、文字づかいに凝りたがる。『漢書』などを讀むと、すぐいくつかの字を取りこむ。洪邁はなかなかの人だが、やはりただ二三行ばかり文章の調子のよさそうなものに目をつけて讀んでいるだけだ。」また論じられるには、「南豐はまだちよつとは字を使えていた。歐・蘇は難しい字をまったく使わなかったのに、文章はかくもすばらしい。包揚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「字子」は、ここでは「字」づかいを指すと解釋した。『漢書』が擧げられるのは、『清波別志』卷下に「班史多用古字」というような認識が背景にあるであろう。「字子」という語の示す範圍が廣いことは、次の例からもうかがえる。「解文字、下字最難。某解書所以未定、常常更改者、只爲無

那恰好底子。把來看、又見不穩當、又著改幾字。所以橫渠說命辭爲難。」〔大學一 綱領〕一四・258)

「收拾」は、拾い集める、取りこむ。

「洪邁」は、字は景廬、號は容齋、諡は文敏。鄱陽の人。

一一三三・一一〇二。『容齋隨筆』「夷堅志」など多くの著述がある。『宋史』卷三二三。

「南豐」は、曾鞏、「歐蘇」は、歐陽脩と蘇軾。

128 凡人做文字、不可太長、照管不到、寧可說不盡。歐蘇文皆說不曾盡。東坡雖是宏闊瀾翻、成大片滾將去、他裏面自有法。今人不見得他裏面藏得法、但只管學他一滾做將去。

およそ文章を書くには、長すぎてはいけない。手に負えなければ、むしろいい盡くさないほうがよい。歐・蘇の文章はみないい盡くしていない。東坡の文章は規模が雄大で波亂に富み、大きなうねりを成して展開していくが、彼の中では自ずとしまりがある。今の人は彼の中にしまりが隠されているのに気づかず、ただ勢いのよさばかりを真似ている。

(校勘) 朝鮮古活字本 「滾」↓「衰」

朱子語類論文篇譯注(五)(興膳・木津・齋藤)

朝鮮古寫本 記錄者名 缺↓「庚」

(注) 「瀾翻」は、波亂に富むさま。疊韻の語。

「成大片」は、大きな固まりをなす、の意。『語類』にしばしば見える「打成一片」などと同類の言い回し。

「滾將去」は、水が勢いよくかつ止めどなく流れていくさまをイメージするであろう。「吉凶悔吝、一息不曾停、如大車輪一般、一恁滾將去」(『易五 乾下』六九・1712)、また「片」と組み合わせる例としては、「有自象山來者。先生問、「子靜多說甚話。」曰、「却如時文相似、只連片滾將去。」(『陸氏』一二四・2970)が近い。

129 文字或作「做事」。無大綱領、拈掇不起。某平生不會做補接底文字、補湊得不濟事。方子。

文章或いはものごとは、大本になるものがなければ、まとまらない。わたしはふだんからつぎはぎの文章は書かない。つぎはぎなど何の役にも立たん。」方子記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 「或作做事」↓缺

(注) 「拈掇」は、まとめる。「郭子和傳其父學、又兼象數、其學已雜、又被謝昌國拈掇得愈不是了」(『程子門人 郭立之 子和』一〇一・2576)

「補接」「補湊」は、つぎはぎをする、寄せ集めをする。

「大序却好、或者謂補湊而成、亦有此理。書小序亦未是。」  
〔詩一 綱領〕八〇・2075)

130 前輩云、「文字自有穩當底字、只有始者思之不精。」又曰、「文字自有一箇天生成腔子、古人文字自貼這天生成腔子。」節。

一昔前の人が「文章には自ずとびたりとくる字があるのだが、最初は考えてもピンとこない」といつている。またいわれるには、「文章にはもともと天生の調子というものがある、昔の人の文章はおのずとこの天生の調子にかなっているのだ。」甘節記す。

〔注〕「穩當」は、しつくりする。落ち着く。「……又問、  
「孟子集注言「心者、具衆理而應萬事。」此言「妙衆理而宰萬物」、如何。」曰、「妙」字便稍精彩、但只是不甚穩當、  
「具」字便平穩。」(大學四或問上 經一章 古之欲明明德於天下一段)一七・382)

131 因論今世士大夫好作文字、論古今利害、比並爲說、曰、  
「不必如此、只要明義理。義理明、則利害自明。古今天下

只是此理。所以今人做事多暗與古人合者、只爲理一故也。」大雅。

ついでに、今の士大夫がよく文章を書いて古今の利害を論じ、あれこれくらべて説を立てることを論じていわれるには、「何もそんなにすることはない。ただ義理が明らかになればいいのだ。義理が明らかになれば、利害もおのずと明らかになる。昔も今も天下にはただこの理あるのみだ。今の人のやるのが古人とよく暗合するのは、ただ理が一つであるからなのだ。余大雅記す。

〔注〕「利害」は、治政の利害得失。  
「比並」は、比較すること。「讀書法下」103條を参照。

132 人做文字不著、只是說不著、說不到、說自家意思不盡。  
燾。

人が文章をちゃんと書けないのは、つまりちゃんといえていないことであり、十分にいえていないことであり、自分の考えを盡くしていないということだ。呂燾記す。

133 看陳蕃叟同合錄序、文字艱澁、曰、「文章須正大、須教天下後世見之、明白無疑。」揚。

陳蕃叟の「同合錄序」の文章が晦澁なのを見ていわれるには、「文章は正大でなければならず、天下の人後世の人が見て明白で疑いの餘地のないものになければならぬ。」包揚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く  
(注) 「陳蕃叟」は、陳武。「論文篇下」100條に既出。

134 因說作應用之文、「此等苛禮、無用亦可。但人所共用、亦不可廢。」曹宰問云、「尋常人徇人情做事、莫有牽制否。」曰、「孔子自有條法、「從衆、從下」、惟其當爾。」謙。ついでに實用の文を書くことについていわれるには、

「こんなに煩瑣な決まりは、用いなくてよい。ただみなが使っているものを、止めるわけにもいくまい。」曹宰が「普通の人が情のままにやって、齒止めが效くでしようか」と尋ねると、いわれるには、「孔子にはちゃんと決まりがあった、つまり「衆に従い、下に従う」というもので、

それにつきよう。」廖謙記す。

(校勘) 朝鮮古寫本「曰」↓「先生云」

(注) 「應用之文」は、公けの場合に用いる文章のこと。「横渠儘會做文章。如西銘及應用之文、如百衲燈詩、甚敏。到說話、却如此難曉、怕關西人語言自如此」(「孔孟周程張子」九三・2362)、「問謙、「曾與戴肖望相處、如何。」曰、「亦只商量得舉子程文。」曰、「此是一厄。人過了此一厄、當理會學問。今人過了此一厄、又去理會應用之文、作古文、作詩篇、亦是一厄。須是打得破、方得。」(「朱子十三 訓門人四」一一六・2792)など。「苛禮」は、煩瑣な決まりごと。「曹宰」は、朱子の弟子の曹彥約(一一五七―一二二八)、字は簡甫。「宋元學案」卷六九。「師事年攷 續」參照。「莫有否」は、諸否疑問文の形式。「從衆、從下」は、『論語』子罕篇の「子曰、麻冕禮也、今也純儉。吾從衆。拜下禮也、今拜乎上泰也。雖違衆、吾從下」を踏まえる。

135 大率諸義皆傷淺短、鋪陳略盡、便無可說。不見反覆辨論節次發明工夫、讀之未終、已無餘味矣、此學不講之過也。抄漳浦課簿。道夫。

だいたいどの考えも淺薄に失っていて、並べたててうち

に底が盡きて、いうべきことがなくなる。繰り返し議論し、順序立てて物事を明らかにする努力がないから、読み終わらないうちに、はや味わいも盡き果てる。「學の講ぜざる」過ちだ。漳浦課簿の寫し。楊道夫記す。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 「抄漳浦課簿」↓缺

〔注〕 「學不講之過」は、「論語」述而篇に「子曰、「德之不脩、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也」を蹈まえる。

〔漳浦〕は漳州の領縣の一。「漳浦課簿」は、「春秋經」(卷八三・三〇)に「漳浦」として「此章、先生親具漳浦縣學課簿」と注記される。朱子が漳州に赴任していたのは、一一九〇から九一年、卷一〇六「外任篇」参照。なお「課簿」とは、學生の出缺考課を記した書冊。

136 顯道云、「李德遠侍郎在建昌作解元、做本強則精神折衝賦、其中一聯云、「虎在山而藜藿不採、威令風行。金鑄鼎而魑魅不逢、姦邪影滅。」試官大喜之。乃是全用汪玉谿相黃潛善麻制中語、後來士人經禮部訟之。時樊茂實爲侍郎、乃云、「此一對、當初汪內翰用時却未甚好、今被李解元用

此賦中、見得工。」訟者遂無語而退。德遠緣此見知於樊先生。」因舉舊有人作仁人之安宅賦一聯云、「智者反之、若去國念田園之樂。衆人自棄、如病狂昧宮室之安。」

顯道がいうには、「李德遠侍郎は建昌で解元になったとき、「本強ければ則ち精神折衝するの賦」を作りましたが、そのなかの一聯に、「虎 山に在りて藜藿採られず、威令風のごとく行わる。金 鼎に鑄せられて魑魅に逢わず、姦邪影のごとく滅す」とあり、試験官は大いにそれが氣に入りました。ところがこれは汪玉谿が黃潛善を大臣に任命するときの麻制の中の語をそっくり用いたものだったので、のちにある人が禮部を通じて訴えて出ました。そのとき樊茂實は禮部侍郎でしたが、いうには、「この對句は初め汪內翰が用いたときはそれほどでもなかったが、いま李解元によつてこの賦に用いられて、引き立ってきた」と。訴えた者はそこで一言もなく引き下がったのです。德遠はこれが縁で樊先生の知遇を受けました。」先生はついでに昔ある人の作つた「仁は人の安宅の賦」の一聯に、「智者はこれに反ること、國を去りて田園の樂しみを念うが若し。衆

人の自棄すること病み狂いて宮室の安きに味きが如し」とあるのを挙げられた。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕 「顯道」は、弟子の包揚。

「李德遠」は、李浩（一一一六―一二七六）。德遠は字、またの字を直夫、號は橘園。吏部侍郎に任じられた。『宋史』卷三八八、『宋元學案』卷五八。

「本強則精神折衝」の語は、「朱子七 論兵」（一〇一・276）にも、「本強則精神折衝、不強則招殃致凶」と見える。また、朱子が隆興元（一一六三）に上呈した「癸未垂拱奏筭」の三には、「凡古先聖王所以彊本折衝・威制夷狄之道、皆未可謂備」とも見え、金に對抗して國力を高めようという意識にもとづく語であることが分かる。

「汪玉谿」は、汪浮溪すなわち汪藻（一〇七九―一一五四）を指すか。翰林學士として多くの詔令起草したことは有名。ただしいま『浮溪集』には、ここに該當する制は見られない。

「黃潛善」は、字は茂和、南宋樹立後、右僕射に就き、中書侍郎を兼ねた。一一二九年歿。『宋史』卷四七三。

「樊茂實」は、樊光遠（一一〇二―一一六四）。茂實は字。『宋元學案』卷四〇。

「麻制」は、大臣を任命するための制。

朱子語類論文篇譯注(五) (興膳・木津・齋藤)

「仁人之安宅」は、『孟子』離婁上、「仁、人之安宅也。義、人之正路也。」に基づく。

## 卷百四十 論文篇下

1 或言今人作詩、多要有出處。曰、「關關雎雎」、出在何處。」文蔚。

ある人が、今の人は詩を作るのに典據を求めたがる、という、いわれるには、「關關たる雎雎」に何の典據があるろう。」陳文蔚記す。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕 「關關雎雎」は、『詩經』「關雎」の句。

「出處」は、出典、典據。「問、「春牛事未見出處、但月令載「出土牛以送寒氣」、不知其原果出於此否。或又云、以示勸耕之意。未詳孰是。」「某嘗見□□云、處士立於縣庭土牛之南。恐古者每歲爲一牛、至春日別以新易舊而送之也。」（『雜類』一三八・3287）

2 因說詩、曰、「曹操作詩必說周公、如云、「山不厭高、

水不厭深。周公吐哺，天下歸心。」又、苦寒行云、「悲彼東山詩。」他也是做得箇賊起、不惟竊國之柄、和聖人之法也竊了。」變孫。

ついでに詩についていわれるには、「曹操は詩を作ると必ず周公を持ち出す。たとえば、「山は高きを厭わず、水は深きを厭わず。周公は哺を吐きて、天下心を歸す」とか、「苦寒行」では「彼の東山の詩を悲しむ」などという。彼はやはり立派な惡人だ。國の政柄を掠め取っただけでなく、聖人の法まで掠めおった」。林變孫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 上卷所收 「苦寒行」↓「苦難行」、  
「東山詩」↓「東山情」、「做得箇賊起」↓「做得个賊」、  
「孫」↓「雉 按林變孫錄同」  
(注) 「曹操」に對して朱子の見方はごく正統的なものであり、當然ながら評價は嚴しい。その人と詩の關係について述べたものとしては、「比雖是較切、然興却意較深遠。也有興而不甚深遠者、比而深遠者、又係人之高下、有做得好底、有拙底。常看後世如魏文帝之徒作詩、皆只是說風景。獨曹操愛說周公、其詩中屢說。便是那曹操意思也是較別、也是乖。」  
〔詩〕 綱領 八〇・2069)  
「山不厭高、……」は、曹操「短歌行」の句。ただし、

「文選」卷二七樂府上に收めるものは「山不厭高、海不厭深」であり、「水不厭深」に作るのは、「宋書」樂志に收める一首である。「樂府詩集」は兩首とも收め、前者を「本辭」、後者を「晉樂所奏」とする。

「苦寒行」は、「文選」卷二七樂府上。「東山詩」は「詩經」幽風「東山」。その小序に、「東山、周公東征也。周公東征、三年而歸。勞歸士大夫美之。故作是詩也。一章言其完也。二章言其思也。三章言其室家之望女也。四章樂男女之得及時也。君子之於人、序其情而閔其勞、所以說也。說以使民、民忘其死、其唯東山乎」という。

「做得起」は、いとなるにふさわしい資格がある。  
「和也」は、いさえし、ということ。現代漢語の「連也」に同じ。「其命維新」は新民之極、和天命也新。」  
〔大學三傳〕三章釋新民 一六・319)

3 詩見得人。如曹操雖作酒令、亦說從周公上去、可見是賊。若曹丕詩、但說飲酒。

詩は人をあらわす。曹操は酒令を作つても、やはり周公へ持つていつて、惡人だとはれてしまふ。曹丕の詩などは、ただ酒を飲むことばかりだ。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く



(注) 「酒令」は、一般にいう宴會での遊びではなく、ここでは「短歌行」などの酒席で作った詩を指すだろう。

4 古詩須看西晉以前、如樂府諸作皆佳。杜甫夔州以前詩佳。夔州以後自出規模、不可學。蘇黃只是今人詩。蘇才豪、然一滾說盡、無餘意。黃費安排。德明。

古詩は西晉以前のを讀むべきで、樂府の諸篇などとはどれもよい。杜甫は夔州以前の詩はよいが、夔州以後は自分から枠をはみ出してしまっており、眞似てはいかん。蘇・黃はまったく今の人の詩だ。蘇は豪放な資質だが、一氣に言い盡くして、餘韻に缺けるし、黃はあれこれ凝りすぎる。廖德明記す。

(校勘) 朝鮮古活字本 「滾」↓「衰」  
朝鮮古寫本 上卷所收 「滾」↓「衰」

(注) 「規模」は、のり、枠組み。

杜甫が夔州に赴いたのは、大曆五(七六六)年、五五歳のとき。また、後出17條を参照。

「蘇黃」は、蘇軾と黃庭堅。蘇軾の詩が「一滾說盡」であることについては、前出128條を参照。

朱子語類論文篇譯注 (五) (興膳・木津・齋藤)

5 選中劉琨詩高。東晉詩已不逮前人、齊梁益浮薄。鮑明遠才健、其詩乃選之變體、李太白專學之。如「腰鎌刈葵藿、倚杖牧雞豚」、分明說出箇倔強不肯甘心之意。如「疾風衝塞起、砂礫自飄揚。馬尾縮如蝟、角弓不可張」、分明說出邊塞之狀、語又俊健。方子。

『文選』のなかで劉琨の詩は格調が高い。東晉の詩はもはや前人に及ばず、齊梁はさらに浮薄になった。鮑明遠は力強い資質で、その詩はまあ『文選』中の變調で、李太白はもっぱらそれを學んだ。「鎌を腰にして葵藿を刈り、杖に倚りて雞豚を牧う」などは、芯が強く現狀に満足しない氣持ちがよくあらわれているし、「疾風 塞を衝きて起こり、砂礫 自ずから飄揚す。馬尾 縮んで蝟の如く、角弓 張る可からず」などは、邊塞の様子がよくあらわれている、ことも力強い。李方子記す。

(校勘) 朝鮮古活字本 「個」↓「箇」  
朝鮮古寫本 上卷所收 「方子」↓「略記當時語意如此」

方子

(注) 「劉琨」は、字は越石。二七〇―三一八。『晉書』六

二。「語類」にはまた「古之名將能立功名者、皆是謹重周密、乃能有成。如吳漢朱然終日欽欽、常如對陳。須學這樣底、方可。如劉琨恃才傲物、驕恣奢侈、卒至父母妻子皆爲人所屠。今人率以才自負、自待以英雄、以至恃氣傲物、不能謹嚴。以此臨事、卒至於敗而已。要做大功名底人、越要謹密、未聞粗魯闊略而能有成者。」（「歷代」二二三・三三〇）のようにも言及される。

「鮑明遠」は、鮑照（四一四？～四六六）。李白が鮑照の詩を繼承したことは、『苕溪漁隱叢話』引『詩眼』に「李太白亦多建安句法、而罕全篇、多雜以鮑明遠體。」など、しばしば指摘される。

「變體」は、例えば『詩經』における「正」と「變」のように、ここでは『文選』の中における變調として理解した。

「腰鎌刈葵藿、……」は、「東武吟」の句。『文選』卷二八樂府下。

「疾風衝塞起、……」は、「出自薊北門行」の句。『文選』卷二八樂府下。ただし『文選』は「馬尾」を「馬毛」に作る。

6 淵明詩平淡出於自然。後人學他平淡、便相去遠矣。某後生見人做得詩好、銳意要學。遂將淵明詩平側用字、一一依他做。到一月後便解自做、不要他本子、方得作詩之法。

淵明の詩の平淡さは自ずからなるものだ。後の人が彼の平淡さを眞似すると、似ても似つかぬものになる。私は若い頃、人が巧みに詩を作っているのを見ると、一所懸命學ぼうとした。そこで淵明の詩の平仄も用字も、ひとつひとつ眞似て作ったが、一月も経てばもう自分で作れるようになって、淵明というお手本は要らなくなり、ようやく作詩のこつを身につけることができた。

（校勘） 朝鮮古寫本 上卷所收

（注） 朱子が陶淵明の文學を愛好したことについては、「先生每觀一水一石、一草一木、稍清陰處、竟日目不瞬。飲酒不過兩三行、又移一處。大醉、則跌坐高拱。經史子集之餘、雖記錄雜記、舉輒成誦。微醺、則吟哦古文、氣調清壯。某所聞見、則先生每愛誦屈原楚騷、孔明出師表、淵明歸去來并詩、并杜子美數詩而已。」（「朱子四 內任 雜記言行」一〇七・二〇七）などの記録が參考になろう。また、「陶淵明、古之逸民。」（「歷代三」一三六・三三三）の評も有名である。

「平淡」は陶淵明の詩を評してしばしば用いられる言葉。次條の注で述べるように、宋本『箋注陶淵明集』は「讀山海經」其十について曾絃の評を引くが、その最初に「餘嘗評陶公詩、語造平淡而寓意深遠、外若枯槁、中實數腴、眞詩人之冠冕也」という。葛立方『韻語陽秋』には「陶潛謝朓皆平

淡有思致、非後來詩人怵心劇目瑣瑣者所爲也。」また後の12條、「論文篇上」66・69條も參照。

「出於自然」ということについては、『龜山語錄』に「淵明詩所不可及者、冲澹深粹、出於自然、若曾用力學、然後知淵明詩非著力所能成」とあるのも參考にならう。

「某後生」は、「私の若い頃」の意でとった。「後生」は、「常聞先生後生時、極豪邁、一飲必數十盃。」（羅氏門人李愿中）一〇三・2601「且如昔日老南和尚、他後生行脚時、已有六七人隨著他參請。」（本朝六 中興至今日人物下）一三三・3183のように、『語類』でもしばしば「若い頃」の意で用いられる。

「平側」は、「平仄」に同じ。ここでは廣く音律を指す。

7 或問、「形天無千歲」、改作「形天舞千戚」、如何。」

曰、「山海經分明如此說、惟周丞相不信改本。向鄉林家藏邵康節親寫陶詩一冊、乃作「形天無千歲」。周丞相遂跋尾、以康節手書爲據、以爲後人妄改也。向家子弟攜來求跋、某細看、亦不是康節親筆、疑熙豐以後人寫、蓋贋本也。蓋康節之死在熙寧三三年間、而詩中避『畜』諱、則當是熙寧以後書。然筆畫嫩弱、非老人筆也。又不欲破其前說、遂還

之。」雉。

ある人が尋ねるには、「形天無千歲」を「形天舞千戚」に改めるのはどうでしょう。」いわれるには、『山海經』にははっきりとそういつているのだが、周丞相だけは改めたテキストを信じなかった。邵康節が自ら寫したという向鄉林家藏の陶詩集一冊には、「形天無千歲」とある。周丞相はそこで跋を書き、康節が手づから書寫したことを根據に、「形天舞千戚」とするのを、後人の妄改だと判定した。向の息子が私に跋を書いてくれと持ってきたので、仔細に見たが、康節の親筆ではなく、どうも熙寧・元豐年間以降の人の手じゃないかと思う。つまり贋物さ。というのも、康節は熙寧三三年あたりに亡くなっているが、詩の中に（神宗の諱「頊」と同音の）「畜」の字を避けているところからすれば、熙寧以後の書に違いない。若書きの手で、老人の筆蹟ではない。先人の説をひっくり返すのははばかられて、そのまま返したのさ。」吳雉記す。

（校勘） 朝鮮古活字本 「改作形天舞千戚」↓「改作形天舞千戚」

朝鮮古寫本 上卷所收 「形天無千歲」 ↓ 「形天無千歲」

(注) 「周丞相」は、周必大。その「老堂詩話」に、「江州陶靖節集未載、宣和六年、臨溪曾絃謂靖節讀山海經詩、其一篇云「形天無千歲、猛志固常在」、疑上下文義不貫、遂按山海經有云、「形天、獸名、口銜干戚而舞」、以此句爲「形天舞干戚」、因筆畫相近、五字皆訛、岑穰晁詠之撫掌稱善。餘謂絃說固善、然靖節此題十三篇、大概篇指一事。如前篇終始記夸父、則此篇恐專說精衛銜木填海、無千歲之壽、而猛志常在、化去不悔。若併指刑天、似不相續。又況末句云、「徒設在昔心、良晨詎可待」、何預干戚之猛耶。後見周紫芝竹坡詩話第一卷、復襲絃意以爲已說、皆誤矣」とある。なお、『竹坡詩話』には、「有作陶淵明詩跋尾者、言淵明讀山海經詩有「形天無千歲、猛志固常在」之句、竟莫曉其意。後讀山海經云、「形天、獸名也、好銜干戚而舞。」乃知五字皆錯。「形天」乃是「形天」、「無千歲」乃是「無干戚」耳。如此乃與下句相協。傳書誤謬如此、不可不察也」とある。

また莫友芝翻宋刊本『陶淵明集』には、曾絃の語を以下のように記す。「餘嘗評陶公詩、語造平淡而寓意深遠、外若枯槁而中實敷映、眞詩人之冠冕也。平生酷愛此作、每以世無善本爲恨、頃因閱讀山海經詩、其間一篇云「形天無千歲、猛志固常在」、且疑上下文義不甚相貫、遂取山海經相校、經中有云、「形天、獸名也、口中好銜干戚而舞。」乃知以此句是「形

天舞干戚」、故與下句「猛志固常在」意旨相應。五字皆訛、蓋字畫相近、無足怪者。閒以語友人岑穰彥林・晁詠之之道、二公撫掌驚歎、亟取所藏本是正之。因思宋宣獻言、「校書如拂几上塵、旋拂旋生。」豈欺我哉。親友范元義寄示我陽大守公所開陶集、想見好古博雅之意、輒書以遺之。宣和七月中元曾絃書刊。」

「向鄉林」は、向子諲、字は伯恭、鄉林は號。一〇八六一一五三もしくは一〇八五一一一五二。『宋史』卷三七七。『宋元學案補遺』卷二〇。朱子に「向鄉林文集後序」(『文集』卷七六)がある。

「邵康節」は、邵雍、字は堯夫。康節は諡。一〇一一一〇七七。著に『伊川擊壤集』『皇極經世』などがある。

8 蘇子由愛選詩「亭臯木葉下、隴首秋雲飛」、此正是子由慢底句法。某却愛「寒城一以眺、平楚正蒼然」、十字却有力。雉。

蘇子由は『文選』の詩に「亭臯 木葉下、隴首 秋雲飛」とあるのを好んだが、これなどはまさに子由のしまりのない句作りだな。私はむしろ「寒城 一たび以て眺むれば、平楚 正に蒼然たり」が好みだ。力強い十字じやな

いか。吳雉記す。

〔注〕「蘇子由」は、蘇轍。

「亭皋木葉下、隴首秋雲飛」は、柳惲「擣衣」詩だが、『文選』にはなく『玉臺新詠』卷五に見える。なお、この句は『文鏡秘府論』東卷「二十九種對」其二十三「偏對」にも引かれる。

「寒城一以眺、平楚正蒼然」は、謝朓「郡內登望」の句、『文選』卷三十。

9 齊梁間之詩、讀之使人四肢皆懶慢不收拾。

齊梁のころの詩は、讀むうちに身體中の力が脱けて始末に負えなくなってしまう。

〔校勘〕朝鮮古活字本 「齊梁間之詩」↓「齊梁間人詩」  
朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕「懶慢」は、疊韻の語。ぐったりすること。

10 晉人詩惟謝靈運用古韻、如「祐」字協「燭」字之類。  
唐人惟韓退之柳子厚白居易用古韻、如毛穎傳「牙」字・「資」字・「毛」字皆協「魚」字韻是也。人傑。

朱子語類論文篇譯注(五)(興膳・木津・齋藤)

晉人の詩では謝靈運だけが古韻を用いている。「祐」字を「燭」字韻に叶韻させるなどがそれだ。唐人では韓退之・柳子厚・白居易だけが古韻を用いており、「毛穎傳」の「牙」字・「資」字・「毛」字がどれも「魚」字韻と叶韻するなどはそれだ。萬人傑記す。

〔校勘〕朝鮮古寫本 上卷所收

〔注〕朱子がいう謝靈運詩は、實際は詩ではなく『藝文類聚』一三所引「武帝詠」のことであろう。そこには、「悠悠聲教、綿綿川陸、北獻艷裘、南貢金竹、鑿首冠幘、穿胸斂服、寒穴欣日、巢栖翫屋、匪惟遐譚、靈物偕就、孰是人事、自天所祐、甘露芝草、祥雲瑞宿、嘉禾連木、素鳥皓獸」と、「就・祐・獸」の去聲有韻字が「陸・竹・屋・宿」の入聲屋韻一・三等字と押韻する例が見られる。去聲韻は上古には音節末に濁聲母韻尾を有していたと考えられており、去聲と入聲との通押例も『詩經』などに實際數多く見られる。ただ、嚴密には「祐」と「就・獸」との上古韻部は異なり、「祐」はむしろ職韻德韻(ここでは服字)などと押韻する字である。

韓愈「毛穎傳」の該當箇所は、「筮者賀曰、今日之獲、不角不牙、衣褐之徒、缺口而長鬚、八竅而跣居、獨取其鬚、簡牘是資、天下其同書、奏其遂兼諸侯乎」(『昌黎先生集』卷八)で、朱熹の注に「筮詞皆用古韻、詩、祈父、豫王之爪牙、

靡所止居、古牙居通、髦與資亦然」とある。「牙」は中古音麻韻、「資」は脂韻、「髦」「毛」は豪韻、他の「徒」は模韻、「居・書」は魚韻、「鬣」は虞韻、「侯」は侯韻であるが、上古韻では「資」が脂韻、「髦」が宵韻、「鬣・侯」が侯韻である以外、すべて魚韻に屬するため、押韻も不思議ではない。ただし「髦」「鬣」「侯」は段玉裁の『六書音韻表』では同じ第二類に屬すのだが「資」は第六類で通押は難しい。韓愈が古韻に倣いながら倣いきることのできなかった例と言えよう。

11 唐明皇資稟英邁、只看他做詩出來、是甚麼氣魄。今唐百家詩首載明皇一篇早渡蒲津關、多少飄逸氣概。便有帝王底氣餒。越州有石刻唐朝臣送賀知章詩、亦只有明皇一首好有曰、「豈不惜賢達、其如高尚何。」雉。

唐の明皇は英邁な資質を持っていたが、彼の詩の作り方を見るだけで、いやはや大した氣魄だ。いま「唐百家詩」の巻首に明皇の「早に蒲津關を渡る」詩一篇を載せているが、何とも竝外れた氣概、まさに帝王の氣焰だ。越州には唐の朝臣が賀知章を送った詩の石刻があるが、明皇の一首だけがすばらしく、「豈に賢達を惜しまざらん、其れ高尚

を如何せん」とある。吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 上卷所收「氣餒」↓「氣鬣」(注) 「唐明皇」は、玄宗のこと。

「唐百家詩」は、王安石の『唐百家詩選』。その劈頭に玄宗の「早渡蒲關」を載せる。「鐘鼓嚴更曙、山河野望通。鳴鑾下蒲阪、飛旆入秦中。地險關逾壯、天平鎮尚雄。春來津樹合、月落戍樓空。馬色分朝景、鷄聲逐曉風。所希常道泰、非復俟繡同。」なお『全唐詩』卷三は「早度蒲津關」とする。

「飄逸」は、竝外れていること。

「越州有石刻唐朝臣送賀知章詩」については、『唐詩紀事』卷十七に、「知章八十六、臥病、冥然無知。疾損、上表乞爲道士還鄉、明皇許之。……詔令供帳東門、百寮祖餞。御製送詩、并序云、「天寶三年、太子賓客賀知章、鑒止足分、抗歸老之疏、解組辭榮、志期入道。朕以其年在遲暮、用循挂冠之事、俾遂赤松之遊。正月五日、將歸會稽、遂餞東路、乃命六卿庶尹大夫供帳青門、寵行邁也。豈惟崇德尚齒、抑亦勵俗勸人、無令二疏獨光漢冊。乃賦詩贈行。」詩云、「遺榮期入道、辭老竟抽簪。豈不惜賢達、其如高尚心。實中得祕要、方外散幽襟。獨有青門餞、羣英恨別深。」……」とあり、詩句にわずかな異同がある。この時李白も送別の詩を作っている。「賀知章」は、字は季真、六五九〜七四四。飲中八仙の一。李白を「此れ天上の謫仙人なり」と評したのは有名。『舊唐

書』一九〇中、『新唐書』卷一九六。

譯注者後記 本稿作成の過程で、蔡毅・錢鷗・氏岡眞士・森田浩一の諸君によるレジュメを参考にした。謝意を表する。